

脚気病とかけて

新井 宏

日露戦争に負けていたとしたら、脚気を続発させた森鷗外とその一派の陸軍医務首脳部の責任は極めて重大であった。幸いだったのは、海軍では陸軍とは異なり、日本海海戦で脚気が発生することなく戦闘員がベストコンディションで臨み、勝利をおさめることができたことである。

大正六年九月五日、森鷗外は一年三ヶ月にわたる『伊澤蘭軒』の新聞連載を終えるに当たって、「わたくしは学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない。天下は常識に富める人の多きに堪へない」と結んだ。

後に鷗外の代表作となる『渋江抽斎』や『伊澤蘭軒』は、一見して歴史考証学かと思紛う体裁で、難解であり、新聞連載は当初から不評で非難が相次いでいた。負けず嫌いで定評のある鷗外が、連載を終えるにあたり、世俗の批判に昂然として反論した部分である。

私はこの言葉が気に入っていた。常識に囚われていては、真の学問の進歩など有り得ないと意に解釈して、引用さえしていた。しかし、どうやら私の理解は間違っていたようなのである。

その頃、鷗外は既に陸軍軍医総監・医務局長を辞任していた。終生の汚点「脚気病細菌説」の誤謬は、もはや権威や権力をもってしても覆い隠すことができなくなりつつあった。医務局長辞任とともに臨時脚気病調査会の会長職は降りたが、引き続き臨時委員として、脚気栄養障害説に反対し、細菌説を唱え続けてはいたものの、調査会の外では、脚気病栄養障害説が大勢となっていた。

それは、日清、日露戦争で膨大な脚気病死者を出した鷗外の責任を改めて問うことであった。鷗外が信奉していた学理が、世俗の白米障害説に敗れるという、鷗外に

とつては耐え難い時期であった。したがって、そのことを知って「学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない」を読むと、理解は自ずから異なったものとなる。

今でこそ、鵑外が脚気細菌説によって、日清・日露戦争で大量の脚気病死者を出したことは良く知られている。しかし、このことが公に指摘されたのは昭和五十六年のことである。事実、手持ちの筑摩書房昭和四十六年版の『森鵑外集』に付された膨大な解説には、脚気の「カ」の字さえ出していない。

坂内正は『鵑外の最大の悲劇』の帯で次のように述べている。

……秘密とは、例えば近年明らかにされつつある陸軍兵食論の致命的誤りと、その誤りの固執とが陸軍に齎した脚気惨禍についての彼の重大な関与と責任である。その結果、陸軍は日清戦争で四万一千余の脚気患者と四千余の同病死者をだしただけでなく、次の日露戦争でも二十五万余の患者と二万八千人にのぼる同病死者をだしたのである。……

現在では、脚気病は過去のものとなり、その原因がビタミンB1の不足にあったことなど誰でも知っている。しかし、明治時代はそうではなかった。だから、今の基準で鵑外を裁くのは酷かも知れないとの考えもある。

ところが、現実はそのようではなかった。日清戦争を遡ること七年も前から、麦食混合や洋食が良い結果をもたらすという常識的なデータなら山ほどあったのである。

例えば、陸軍衛生統計によると大阪鎮台と近衛師団の脚気罹患率は明治十一年から十八年まで三十パーセントを上下していたのが、麦飯支給を開始した十九年以降、数パーセントに激減している。これはそれ以前から海軍で行われていた脚気対策を試験した結果であった。

麦食が有効なのは、海軍においては既に常識であった。明治二十二年には、海軍軍医総監高木兼寛が宮中に参内し、麦飯採用等の糧食改善によって海軍から脚気が遂に根絶したことを奏上させしている。

ところが、鵑外は、統計によって得た法則は因果と関係させてはならないと主張する。要は、「麦食論」など理論ではないと逆襲し、一般栄養論として、白米食の優秀性を主張したのである。このように、鵑外の論争の手法は、相手の主張の論証不足あるいは論証不可の部分に衝いて、それを全体の主張の欠陥と理解させる筆力にあった。統計現象のように、多くは法則に従うが、中には例外がある場合が絶好の対象であった。

現代の疫学が統計学によって成立していることに比較すれば、如何に認識が誤っていたことであろうか。たばこが、肺がんの原因になると統計データが示すと、そ

れではたばこを吸わない者がなぜ肺がんに罹るかと反論しているようなものである。

当時、パン食の欧米では、脚気病など全く問題になっていなかった。鵬外が学んだ学問は近代的な細菌学である。その学問で説明できないような漢方医的な「現象論」は、常識に過ぎず、論拠とはならないとの信念に立っていた。しかも、当時の陸軍や東京医科大学はドイツ医学の牙城であり、イギリス医学の流れを継ぐ亜流の海軍医学との対抗意識もあって麦飯を排除する「反栄養障害説」が強烈であった。ドイツ留学者としては四人目で、出世志向の強い鵬外が、白米食の消化吸収性の優れていることを武器にして、陰に陽に「麦食論」を駆逐しはじめる。これによって、陸軍内部で拮がっていた麦飯採用は完全に逆戻りしてしまう。

不合理の極まりであった。白米食の優秀性と、脚気に対する麦飯の効果とは全く無関係なことぐらい誰にも判っていた。しかし、部分を捉えて論破する鵬外の手法が成果を収めて行く。そして大悲劇を迎えたのである。

日露戦争の戦死者数は五万五千名であった。それに対して脚気病死者が二万八千名である。しかも、その脚気病の責任を負うべき鵬外が、日露戦争後の明治四十年には軍医総監・医務局長に昇任する。脚気病防止のために

なぜ麦食を採らなかったかとの非難が、影では渦巻いていたが、専門家である医学中枢部分は、誤謬を再生産してこれを塗布した。

このように並べ立てて見るだけでも、「常識よりも学殖」を優先させていた陸軍医学の首脳部の独善的な教条主義が強烈であったことが判るであろう。いくら麦飯が有効だという状況証拠を並べても、一顧だにできなかった世界が現実存在していたのである。

似たような話が今の考古学界にもたくさんある。旧石器捏造事件などその最たるものであった。

ドラマは、一九八一年、宮城県の座散乱木遺跡で、四万数千年前の石器が発見され、日本にも中期に遡る旧石器時代があったことを高らかに宣言したことで始まった。

これに勢いを得たのであろうか、主人公の藤村新一は、三年後の一九八四年には古川市の馬場壇A遺跡でも十七万年前の石器を発見し、一気に旧石器前期まで遡らせる。それからというものは、留まることを知らぬように、わずか二十年たらずの間に、十万年単位で「日本人の起源」を更新し続け、ついには秩父市の長尾根、小鹿坂両遺跡そして宮城県築館町の上高森遺跡や北海道十津川町の総進不動坂遺跡で、五十万年、六十万年、七十

万年前の石器を発見し、世界の人類史の通説を覆す大発見を成し遂げる。

科学は本来疑ることからスタートする。世紀の大発見が二度、三度と続く異様さに対しては、疑惑を感じない方が異常である。それが毎年続くとなると「オカルト」以外の何者でもない。これが「常識」による判断である。

しかも当初の座散乱木遺跡に関してさえ、石器専門の小田静夫が人工遺物の確かな証拠は存在しないと真っ向から異議を唱え、火山学者の町田洋が火砕流の中から石器がでるわけがないと指摘していた。続々と現れる石器を見て、中国や韓国の学者さえ疑問を呈しているのに「大成果」はゆるがなかった。ヨーロッパの石器に詳しい竹岡俊樹が、氷河期を経ている石器が平面に並んで出てくる不思議さに加え、これらの石器が指先の微妙な制御のできない旧石器原人に作れるはずがないと指摘し、これは「事件だ」と言っても無視された。

「他人の持ち歌は歌わない」。それが考古学界の悪しき風習であった。批判は発掘者や発見者の功績を貶め横取りする行為のように忌み嫌われ、捏造が拡大再生産される過程を放任してしまった。

結局、事件はマスコミの暴露によってしか解決できず、考古学界は自浄の機会を失ってしまったのは周知の

通りである。

学理すなわち「学殖」と言うものは、一般的に口当たりの良い「美しい理論」で成立っている。森鷗外らの陸軍医学陣が「細菌学」を信奉したのは、それが「美しい理論」であったからだ。考古学界も旧石器捏造を導いた岡村道雄の「美しい理論」に幻惑されてしまった。この「美しい理論」に合うように発掘成果を挙げるのが藤村新一に課せられた役割であった。

三角縁神獸鏡が魏鏡だという説も「美しい理論」である。

昭和三十二年に小林行雄が唱えた三角縁神獸鏡分配論や古代国家像は、考古学者ばかりでなく歴史学者も魅了し、その「美しい理論」の上に数多くの花が咲いた。それが「三角縁神獸鏡は魏鏡」という定説の本体であり、力強さの根源である。すなわち魏鏡説が否定されると、今まで積み上げてきた歴史観や考古学観が全て崩壊する危険があるので、常識や新資料に耳を塞いでも「魏鏡説」を守ろうとするのである。

しかし「美しい理論」が醜い新資料によって覆されてきたのが「科学」の歴史である。醜い新資料を素早く取り込んで、また新たな「美しい理論」を構築するのが「科学」であるはずなのに、考古学ではそうなっていないかつ

た。

筆者は『理系の視点からみた「考古学」の論争点』と言う本を今年八月に大和書房から上梓した。内容は、最初から最後まで、考古学の定説に反論したものである。それも、抽象的な反論ではアマチュアの見解として無視されてしまうので、徹底して事実をデータで示す構成とした。

思えば、実に多くの「定説」に噛み付いてきたものである。従来の青銅器鉛産地定説を否定し、三角縁神獣鏡魏鏡説を否定し、弥生五百年遡上説を否定し、高麗尺定説を否定し、製鉄開始時期定説を否定し、古代の間接製鉄説や硫化銅鉱使用説を否定してきた。

日本で初めて実証主義を唱えた重野安繹は、根拠の曖昧なものとは全て切り捨てて「抹殺博士」との異名を奉られたが、筆者の場合もあるいは同類なのかも知れない。しかし筆者は、否定した全ての「定説」に対して、より合理的な「美しい対案」を提示してきたつもりである。いや、より合理的な新説を提示する必要上、旧来の定説を批判したと言うのが筆者の立場であり、自分ではさほど人は悪くないと思っっているのだが如何であろうか。

森鷗外はその生涯において、脚気に関しては一度も書いていない。いわば、人間として最も悩んだはずの事件

を完全に素通りしてしまっているのである。だから現代の基準で、人間としての鷗外を批判するのはたやすい。

しかし、鷗外の妻は晩年に『渋江抽斎』や『伊澤蘭軒』を書いたことである。その背景に「脚気」があったのは間違いない。そしてそれらの著作に続いて、私の信奉する学者『狩谷楨斎』を書こうとして、ついになし得なかつたのも鷗外である。

私は、権力寄りの考古学者たちは大嫌いだ、森鷗外は好きである。